

学生運動と東京大学五月祭

－東大紛争期に着目して－

大学経営・政策コース 佐藤 寛也

Student Activism and the University of Tokyo May Festival (*Gogatsusai*)

－ Focusing on the Period of the University Conflict －

Hiroya SATO

History of campus festivals is an important topic of historical studies on the university. In the postwar era, the students sought democracy and peace, aiming to influence society through the campus festival of the University of Tokyo, or *Gogatsusai* (May Festival). In response, the university expressed concern that the neutrality might be undermined by the excesses of the movement. This led to conflicts between the students and the university, particularly during the 1960s and 1970s. This paper describes specific instances of these conflicts, as well as the extreme situation in 1969 when *Gogatsusai* was not held.

目 次

1. はじめに
 - A. 学園祭の歴史
 - B. 五月祭の概要と1950年代までの歴史
2. 大学と五月祭常任委員会との対立
 - A. スローガン禁止問題
 - B. 企画検閲問題
 - C. 名簿提出問題
 - D. 警官パトロール問題
3. 東大紛争による五月祭の不開催
 - A. 東大紛争と安田講堂事件の経過
 - B. 1969年 五月祭開催されず
 - C. 1970年 五月祭の再開
 - D. 1971年 紛争の鎮静化と五月祭
 - E. 1972年 4年生不在の五月祭
 - F. 紛争の余波
4. 東大紛争後の五月祭の変化
 - A. 五月祭の再開と五原則の誕生
 - B. 五月祭の「お祭り化」

5. おわりに

注・引用文献
付記

1. はじめに

本稿は、東京大学の学園祭「五月祭」の歴史について

て、特に学生運動が興隆した1960年代から1970年代にかけての時期に着目し、(1)大学と学生との間に五月祭の開催にあたってどのような対立が生じ、どのように交渉をおこなってきたか、また(2)1969年に五月祭が開催されなかったのはなぜであり、その後の五月祭はどのように再開したのか、について、当時を記録した資料により明らかにするものである。

A. 学園祭の歴史

日本の大学では、その多くにおいて学園祭（大学祭）が開催されている。これらには旧制高等学校の寮祭を起源とするものもあるが、大学全体の祭典として大学祭が全国の大学で開催されるようになるのは1950年代半ばからであると言われている¹⁾。しかし、従来の大学史研究において学園祭の存在が注目を浴びることは多くなかった²⁾。学園祭がどのようにして起こり、どのように変化してきたかを分析することは、大学が、学生が、そして大学と学生の関係が、どのように変化してきたかを正確に理解するうえで重要な視点となる。

筆者はこうした問題関心の下、五月祭の起源と、それが現在に至るまでの変遷とを、各回のプログラム・パンフレットや帝国大学新聞・東京大学新聞の記事などの資料を収集し、それらに基づいて通史を正確かつ詳細に叙述することを自らの研究課題としている。本稿は、その研究課題の一環として、1960年代から

1970年代にかけての五月祭を対象として、その実態を叙述するものである。

B. 五月祭の概要と1950年代までの歴史

東京大学の全学学園祭である五月祭は、毎年5月中下旬の週末、土曜日と日曜日の2日間に亘って文京区の本郷キャンパスおよび弥生キャンパスを会場として開催される。

1923年5月に開催された東京帝国大学学友会主催「大園遊会」をその起源とする五月祭は、1940年代までに「五月祭」の名称で年中行事として定着した。戦況の悪化により1944年、1945年は開催が叶わなかったものの、戦後すぐに再開し、1946年には3年ぶりに開催された³⁾。

戦後初期の五月祭では、反戦思想の広がりの影響で「平和」に関わる取り組みが多く見られた。1950年の五月祭では、五月祭常任委員会により原子兵器（核兵器）禁止アピールに賛同する署名活動がおこなわれ、1万1千筆を超える署名を集めた⁴⁾。この年に五月祭常任委員会は初めて「自由と平和」という「スローガン」を掲げており、1950年代を通じて、東京大学学生新聞紙上の論説でも平和のための五月祭を謳うものが多く見られる⁵⁾。

学生たちは戦後の社会状況の中で、日本の民主化と世界の平和を求め、五月祭を通じて社会に対して働きかけることを目指していた。これに対して大学は、こうした運動が行き過ぎることで大学の中立性が損なわれることを懸念したため、学生と大学の間に対立が生じるようになっていった。五月祭の開催にあたっては、その主催者として学生を代表する五月祭常任委員会と、開催を許可する立場にある大学との交渉が重要な役割を果たすようになっていく。

2. 大学と五月祭常任委員会との対立

1950年までには、学生自治会中央委員会、各学部学生自治会、消費生活協同組合や運動会など、学内の学生団体から選出された委員が集まって実行委員会を組織する、五月祭常任委員会の体制が成立した。五月祭常任委員会は、新制東京大学に設けられた学生委員会（及びその実務機能を担う学生部）を窓口として協議や交渉をおこない、五月祭を開催するようになった。しかし、学生の希望や主張には大学にとって受け入れ難いものも含んでおり、しばしば学生と大学の間に対立が生じることとなった。

A. スローガン禁止問題

1950年の五月祭において五月祭常任委員会は初めて「自由と平和」という「スローガン」を掲げた。このスローガンは、東京大学学生新聞から存在が確認できるのみで⁶⁾、プログラムには掲載されていない。

翌1951年、五月祭常任委員会は「平和のための五月祭」「戦争宣伝の禁止」「民主的権利の確保」という3つのスローガンを全会一致で可決したが、学生委員会はこれらのスローガンに難色を示した。その理由は「第一に五月祭の本質上スローガンをかけがえることは適当でない」「第二に平和という言葉は現在では政治的ニュアンスを感じさせるから」というものであった。これに学生は強く反発したが、最終的にポスターやプログラムにはスローガンを掲げずに「スローガンの趣旨を実質的に確保して行く」とこととするという五月祭常任委員会の譲歩により、妥協が図られた⁷⁾。

翌1952年もスローガンの掲出について大学が否定的な態度を示し、プログラムにスローガンの掲載はなかった⁸⁾。しかし当日は「平和と豊かな生活を求めて」等のスローガンが銀杏並木に掲げられた⁹⁾。この後もスローガンは毎年設定され（1957年のみ有無を含め不明）、1958年にはこうしたスローガンに「基本テーマ」という位置付けがなされた例が見られるものの、この年までプログラム上に掲載されることはなかった。

こうしたスローガンが「統一テーマ」というかたちで設定されたのは1959年が最初であった。この年、プログラムに「統一テーマ」として「帝国主義段階における日本社会の現状解明」が掲げられ¹⁰⁾、以降は統一テーマの設定とプログラムへの掲載が常例となっていく。1960年の五月祭では、第1回の準備会で「五月祭の本来の意義は学園の公開にあるのだから、何もくどくどと基本方針を打ち出す必要はない」とテーマの設定についての反対意見があったものの、最終的には原案どおり承認され、この年は統一テーマとして「帝国主義の新たな世界史的状况」が設定された¹¹⁾。

B. 企画検閲問題

1961年の五月祭では、五月祭常任委員会が「アジア、アフリカ、ラテンアメリカの新しい動向」と題した記念講演会を企画し、インド、ガーナ、キューバの駐日大使の招聘を試みた。学生委員会との協議に先立って各大使館に招聘を打診したところ、インド大使館が大学からの正式な招待状を要求したため、五月祭常任委員会は茅誠司総長に面会のうえ、総長名での正式な招待状を送ることを求め、許可を得て送付した。しかし、

この際に五月祭常任委員会が招聘者としてインド大使の名しか挙げていなかったため、学生委員会との協議の段階に至ってガーナ大使、キューバ大使の招聘計画が発覚すると、学生委員会は社会主義国であるキューバ大使の招聘を認めなかった。その結果、この企画は中止され、インド大使への招待状は撤回されることとなった¹²⁾。

従来、五月祭に出展される企画内容は五月祭常任委員会と学生委員会の協議の場にプログラム原稿のかたちで示されて検討され、大学の承認を得てから実行されることが慣例となっていた。このとき、大学がキューバ大使の招聘を認めず、既に準備の進んでいた企画を中止させたことで、この制度が実質的な検閲であるとの学生からの批判が高まった¹³⁾。その後の五月祭では、プログラム原稿を印刷前に見せるよう求める学生委員会に対し、五月祭常任委員会はそれを拒むようになっていった。

C. 名簿提出問題

五月祭常任委員の名簿は、1965年までは五月祭常任委員会の広報紙「五月祭ニュース」において公開され¹⁴⁾、学生委員会にも提出されていた。しかし、1960年代後半に各学部の学生自治会において委員名簿の不提出運動が起きると、その影響を受けて五月祭常任委員会も学生委員会への名簿提出を拒むようになっていった。各学部の学生自治会はそれぞれの学部においてストライキ等の指導的な役割を果たしていたため、その中心にいる学生が責任を問われて大学・学部から処分を受けることを危惧してのことであった。

大学の記録を見ると、1972年には五月祭常任委員会が名簿の提出を拒否していることが明確に記録されており、1976年まで学生委員会との交渉の席において口頭で選出母体と氏名を紹介するのみとなっていた¹⁵⁾。1977年には学生委員会の求めに応じて名簿の交換がなされ、学生委員会は「大学側と学生側の相互信頼及び親密感が増し、忌憚ない意見を相互に交換し合えるペースが確立」するものとして「特筆に値する」と評価した¹⁶⁾。

翌1978年も名簿の交換はおこなわれたが、五月祭常任委員会は名簿の提出には難色を示し続けたため、1979年以降は「(1)名簿は学生委員会委員長がその責任の下に管理する、(2)名簿は公開しない、(3)名簿は五月祭が無事に終了した後に破棄する」という条件で覚書を交わしたうえで名簿の提出がおこなわれるようになった¹⁷⁾。

D. 警官パトロール問題

五月祭では万単位の来場者が構内を訪れることから、当日は警察官と大学の巡視（警備員）がペアで構内を巡回するパトロールがおこなわれていた（アベックパトロール方式と称された¹⁸⁾）。

1965年、五月祭常任委員会は、警察官の大学構内への入構を認めることは大学の自治を発展させる立場に根本的に反するとして「警官導入には断固反対する。五月祭当日の校内警備は学生が警備隊を組織してこれを行う」ことを決議した。しかし、警察官によるパトロールは必要との立場に立つ大学との間で折り合いがつかず、結果的に警察官と大学の巡視に学生も随行することで落ち着いた（トロイカパトロール方式と称された¹⁹⁾）。

しかしこれでは本質的解決にはあらず、翌1966年も五月祭常任委員会は「警官のパトロールに最後まで反対する」と決議し、警察官によるパトロールができない場合は五月祭を一般公開させないという大学との間で対立を深めた。五月祭常任委員会は警官パトロール反対の署名を集めるとともに、学生による自主警備のための人員を募集した。学生委員会の「警察官によるパトロールは病院地区を中心に日常的にも行われており、研究・教育を警察権力が侵害しない限りは問題ない」との主張に対し、五月祭常任委員会は「大学として自主警備の責任を回避するのは警察権力への屈服であり、警察に大学に対するある種の既得権を与えることになる」と主張し、再び交渉は難航した。最終的に前年のトロイカパトロール方式は廃され、正門の脇、第二食堂の横、学生会館分館の裏（現在の伊藤国際学術研究センター付近）の3箇所をテントを設けてそれぞれに警察官が常駐し、1時間ごとに「連絡」という名目で警察官がテント間を移動して実質的なパトロールをおこなうという結論に至った（ステーション方式と称された²⁰⁾）。五月祭常任委員会は、パトロールという名目がなくなったことを評価したが、五月祭後に「五月祭における警察官の学内警備について」と題する総長談話が突然発表され、その内容が警察官による警備活動を容認するものであったため、五月祭常任委員会はこれに反発した²¹⁾。

1967年には警官パトロール阻止闘争はさらに過激化する。五月祭常任委員会、学生自治会中央委員会と各学部の学生自治会・五月祭実行委員会は共同で警官導入反対闘争委員会を結成し、銀杏並木での連日抗議集会と警官パトロール反対の全学投票を実施した。この全学投票で投票総数の75%を超える2千票超の支

持を得たことを背景に、五月祭常任委員会は学生委員会に対して交渉を申し入れた。学生委員会は「五月祭常任委員会の賛同は求めないが、実力阻止だけは避けてほしい」と発言。五月祭常任委員会から実力阻止はおこなわないとの確約を取り付けると、合意のないまま警察官を導入した。学生委員会のこの対応は学生の声を無視するものとして批判されたが、むしろ学生委員会としては、五月祭常任委員会との交渉が決裂することで大学の評議会が五月祭の中止を決定することを危惧し、五月祭開催のためになんとしても警察官の導入を可とする結論を得る必要があったのである。警察官によるパトロールは前年同様のステーション方式で実施され、当日第二食堂の横に設けられたステーション付近では、警察官の構内導入に反対する学生により「警官帰れ！」のシュプレヒコールが繰り返し叫ばれた²²⁾。

1968年には、学生がついに実力阻止に動く。学生運動の激化を背景に、警視庁は2月に「学内出動基準」を定め、大学からの要請がなくても状況によっては独自に警察官を大学内に出動させることを表明した。五月祭常任委員会が本郷キャンパスを所管する警視庁本富士警察署の署長と会見したところ、署長は五月祭の警備についても警察はこの基準に則って独自の判断でおこなうとの見解を示した²³⁾。こうした情勢を受けて、学生の運動は五月祭のみならず、日常的な大学構内の警察官によるパトロールもすべて撤廃させようという運動に発展した²⁴⁾。

五月祭常任委員会は前年同様、あくまでも大学との交渉により警察官の導入を中止させることが求められているとして、実力阻止はおこなわない立場にたっていたが、医学部、文学部、経済学部の学生らが警官導入阻止闘争委員会を独自に結成し、実力阻止を訴えるようになった²⁵⁾。5月24日(金)、この警官導入阻止闘争委員会の学生を中心とする150人ほどの学生が早朝から集会や学内デモをおこない、龍岡門に座り込みのうえ、通過する車をチェックした。また、安田講堂への突入も何度か試みられた。一方、五月祭常任委員会は銀杏並木で警官パトロール反対の集会を開き、この集会には300人近くが集まった。この集会に集まった学生は龍岡門から本富士警察署まで抗議デモをおこなったが、ここでこれを無許可の路上デモであるとして取り締まる警察官の一团(のちに機動隊員が一般警察官を装っていたことが明らかになった)との衝突が起り、公務執行妨害があったとして学生2名が逮捕された²⁶⁾。五月祭常任委員会や学生自治会中央委員会

は、警察権力による不当逮捕であるとしてこれに強く抗議した²⁷⁾。こうした混乱の中、翌25日(土)に大学は以下の告示を掲示した²⁸⁾。

告示

五月祭は開催しておりますが、学生の一部が大講堂に侵入したり警備問題を誤解して不穏な行動に走っていることは極めていかんであります。一般学生諸君は五月祭公開の趣旨をよく考え冷静に行動されんことを望みます。くれぐれも来学される市民の方に迷惑をかけないように努力して下さい。

5月25日 東京大学

なお、大学としては警察官導入は必要であるとの立場に立っていたものの、教員の中には学生の警察官による構内パトロール反対に理解あるいは同調を示す者も少なくなかったようである²⁹⁾。

3. 東大紛争による五月祭の不開催

警官パトロール問題の経過からもわかるとおり、1960年代後半を通じて学生の行動は過激化し、主張実現のためには実力行使も厭わなくなっていた。その極致ともいえるのが1969年の安田講堂事件である。1969年は東京大学の入学試験が中止されたほか、この年は五月祭も開催されなかった。しかし、五月祭が開催されなかった原因は紛争による構内の混乱それ自体ではなく、その背景にあった学生のストライキの影響による学年暦の乱れ(駒場の前期課程生の本郷への進学の遅れ)にあった。この年の五月祭は中止されたのではなく、延期の末に翌年に至り、結果的に間が2年空いてしまったのである。五月祭は1970年以降、再び毎年開催されるようになり、学生運動とその影響は急速に沈静化していった。

A. 東大紛争と安田講堂事件の経過

東大紛争は、1968年1月に研修医制度の廃止を訴える医学部学生らによる全面ストライキの開始を端緒とする。2月に医局員との衝突事件を起こして退学処分が下された学生の中に、事件当日に東京にはいなかったはずの学生が含まれており、誤認処分であるとして学生が処分撤回を求めたが、大学はこれに応じなかった。6月に状況の停滞打破を企図した一部の急進派学生が安田講堂を占拠、大学はこれに対して機動隊の出動を要請して安田講堂を占拠した学生を退去させた³⁰⁾。

学生の中に学内への機動隊導入を批判する声が高まると、全学共闘委員会を称する学生団体（以下「全共闘」と記す）の主導により抗議活動が各学部にも波及し、10月には10学部のすべてがストライキに入るといふ異常事態に至る。11月には紛争拡大の責任を取って大河内一男総長が辞任した。後任として総長代行に就いた加藤一郎は学生に対し、紛争解決のための集会の開催を呼びかけ、1969年1月に明治神宮外苑内の秩父宮ラグビー場で学生代表団と会談をおこない、「七学部代表団との確認書」（「東大確認書」とも呼ばれる）の締結に至った³¹⁾。

これにより紛争は沈静化に向かったが、確認書の内容に納得しなかった全共闘は闘争継続を主張して安田講堂などの占拠を続けたため、大学は機動隊の出動を再び要請した。これを受けて1月18日（土）から19日（日）にかけて機動隊が安田講堂などの封鎖解除と、全共闘学生の大量検挙をおこなった。これが安田講堂事件として広く知られる事件である。

B. 1969年 五月祭開催されず

1969年に五月祭が開催されなかった直接の原因は、紛争そのものではなく、その背景にあった学生のストライキの影響による学年暦の乱れにあった。全学部ストライキの影響で授業が実施できず、1969年の3月に卒業するはずであった当時の4年生は卒業が延期された。同時に、4月に新3年生となるはずであった駒場の2年生も、前期課程を修了できず本郷への進学が遅れることとなった。当時の五月祭常任委員会は新3年生がその大半を占める構成になっていたため、駒場からの進学の遅れは五月祭常任委員会の発足を困難に

した。例年前年12月～当年1月に発足していた五月祭常任委員会は³²⁾、1969年の五月祭に向けて新たに発足することができないまま、前年度の末を迎えることになった。

4年生のみの本郷キャンパスで五月祭を開催するのは困難であったため³³⁾、東京大学新聞は「新3年生を迎えたうえで秋にも開催する模様」と五月祭の“延期”を報じた³⁴⁾。しかし、結局駒場の2年生の本郷への進学は12月までかかり³⁵⁾、この年の五月祭は開催が叶わないまま、翌年度を迎えることとなった。

C. 1970年 五月祭の再開

1968年の五月祭を主催した第42期五月祭常任委員会の主導により³⁷⁾、各学部で五月祭常任委員の選出がおこなわれ、1970年1月15日（木祝）には第43期五月祭常任委員会が正式に発足した³⁸⁾。3月には学生委員会との交渉が始まり、五月祭常任委員会は従来どおりの休講措置、教室使用許可、財政援助の要求に加え、プログラム原稿の事前確認の廃止³⁹⁾、五月祭当日の警察官によるパトロールの廃止を要求した⁴⁰⁾。

交渉の結果、学生委員会はプログラム原稿の事前確認について「学生の自主性を尊重する」としておこなわないことを認めた。この点は従来と比較すると非常に大きな譲歩となり、交渉の成果として高く評価された⁴¹⁾。ただし、学生委員会は、その前提として「大学の施設を利用する以上、基本的な条件は守らなければならない」とし、参加企画が満たすべき条件として、

- i) 事故の危険性がないこと
- ii) 非営利であること

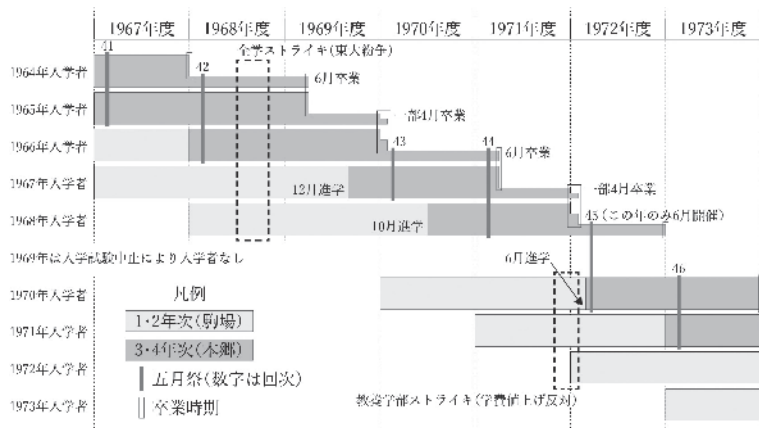


図. 東大紛争前後の学年進行（東京大学広報委員会『学内広報』を元に筆者作成）³⁶⁾

- iii) 本学学生が主体であること
- iv) 期間内に終了すること
- v) 特定の宗教・政党の宣伝活動の禁止

という5つの原則を示した。この条件について五月祭常任委員会は同意し⁴²⁾、これ以降は事実上この5つの原則への合意を前提に企画実行について学生の自主性に委ねるという慣習が成立した（形式的には合意はその年限りのものと扱われ、年ごとに改めて交渉のうえ覚書を取り交わしていた）。

東大紛争の影響は、1年間の空白により五月祭常任委員会内のノウハウ継承が不十分であったこと、紛争の混乱で照明器具や舞台装置などの備品が失われていたこと、学年暦がずれたことで学部によって試験期間が大きく異なったため準備に支障をきたしたことなど多岐に亘ったが、結果的には例年とほぼ同数の企画が出揃い、多くの来場者で賑わった⁴³⁾。

しかしこの年、五月祭の一般公開初日となる30日（土）に、ヘルメットやゲバ棒で武装した全共闘の学生集団が五月祭開催中の構内で暴力、破壊行為に及ぶという事件が発生している。集団は正午過ぎに正門から構内に入って安田講堂前に座り込み、その場で演説していた学生自治会中央委員会議長を襲ってマイクを奪うと、「五月祭粉砕」を叫びながら集会を開始し、抗議した学生に暴行を加えて負傷させた。午後4時15分には集会を終えてデモに移り、総合図書館に乱入して窓ガラスを破壊したり壁に落書きをしたりした後、本郷通りに出た。本郷通りに待機していた機動隊と衝突した一団は、再び構内に戻り、展示物やテント、立て看板を破壊して回り、五月祭常任委員会室を襲撃した。その後、再び構内で集会を催したが、五月祭常任委員会や来場者からの非難の声を受けて解散、逃走した⁴⁴⁾。当日30日（土）の夕方には大学は、遺憾に思う旨の談話を発表したうえ、五月祭翌日の6月1日（月）には総長名で警告文を発した⁴⁵⁾。

学内の破壊暴行行為などについて警告する

五月祭の一般公開中に、学外者を含む一部の人が、五月祭運営の自治機関である五月祭常任委員会による制止を無視して、プログラムの進行を妨げ一般市民にも迷惑を与えたことはまことに遺憾である。とくに共闘系諸君は抗議する学生に凶器をもって暴行を加え、受付テントなどを破壊し、さらに総合図書館等でも無意味な破壊行為を行なった。

大学当局としては、五月祭が学生の自主性を最大限に尊重すべき祭典であること、また一般市民まで不測の混乱に巻き込むことは避けるべきことなどを考慮し、敢えて強い制止行動にでることを自制してきた。だが、この種の破壊暴行行為が今後も繰り返されたときには、強い決意をもって臨むことをここに警告する。

1970年6月1日 東京大学総長 加藤一郎

D. 1971年 紛争の鎮静化と五月祭

翌1971年の第44期五月祭常任委員会は、新3年生が10月に本郷へ進学してから間がない中、例年より約1ヶ月遅れて1月に発足した⁴⁶⁾。紛争の影響で学年暦がずれたため、いくつかの学部では前年度の末に相当する期末試験が5月に実施されることになっていた。五月祭常任委員会は五月祭に配慮して試験日程を延期するよう求めたが受け入れられず、法・文・薬学部では五月祭直前に試験が実施された。当日は大きなトラブルもなく天候にも恵まれ、「両日の来学者は、のべ20万人以上に達するものと見られ」る大盛況となった⁴⁷⁾。学生委員会は「昨年の五月祭と比較した場合、企画数の増加、観客の増加が目立ち、平穏なお祭りであった」と評しており⁴⁸⁾、この点からも東大紛争の混乱は急速に沈静化していたことがうかがわれる。

E. 1972年 4年生不在の五月祭

1972年の五月祭は異例の6月開催となった。1972年2月から教養学部が学費値上げ反対の無期限ストライキに突入し、新3年生が駒場から本郷に進学する見通しが立たなくなる一方、1972年度は1969年の入学試験中止により4年生にあたる入学年度の学年が存在しないため、5月には本郷に（過年度の4年生を除き）学生がいないという事態が生じたのである⁴⁹⁾。

こうした状況を受け、五月祭常任委員会は期日を延期してでも五月祭を開催する方針を固めた⁵⁰⁾。5月に教養学部の無期限ストが解除されると⁵¹⁾、五月祭常任委員会と学生委員会は交渉のうえ、五月祭の期日を6月23日（金）から25日（日）とすることで合意した⁵²⁾。実質的に1学年しかキャンパスにいない状況下での変則的な開催となったが、東大紛争後の学問のあり方を問う企画などが人気を集めた⁵³⁾。この年は大きなトラブルには見舞われなかったものの、大学は火気の使用を厳禁していたにも関わらず最終日に安田講堂前でファイアストームがおこなわれ、学生委員会はこの点について遺憾の意を表明している⁵⁴⁾。

なお、1971年、1972年ともに警察官による構内パトロールはおこなわれていない⁵⁵⁾。1970年についての明確な記述は見いだせていないが、学生委員会との交渉で五月祭常任委員会が警察によるパトロール廃止を要求していたこと、全共闘による破壊暴行事件が発生した際も警察（機動隊）は構外で待機するのみだったことなどを踏まえると、1970年の復活以降、警察官による構内パトロールはおこなわれなくなったと見てよいと思われる。

その後、1973年には学年暦も正常に戻り、五月祭の運営体制も落ち着きを取り戻した。1973年、1974年と連続して企画数が史上最多を更新し、東京大学新聞紙上には「史上最大の五月祭」の見出しが繰り返しみられた。1973年には駒場の教養学部基礎科学科が初めて参加し、名実ともに東京大学全学の祭典となったといった⁵⁶⁾。

F. 紛争の余波

五月祭において東大紛争の余波がみられた最後の事件は、1974年の五月祭当日に発生した総長室占拠事件（大学による呼称としては「5・24警察力の出動問題」）である。

1974年の五月祭開催中の5月24日（金）朝8時15分ごろ、全学闘争委員会を称する学生・職員約10名が安田講堂内に侵入し、総長室に立て籠もった。これは、1970年5月に応用微生物学研究所内で起きた暴行事件をめぐって解雇・休職の処分を受けていた職員の処分撤回を訴えるもので、同時に保健センター前でも30名程度による座り込みがおこなわれた。大学は至急退去するよう警告したが、10時30分頃には総長名で機動隊の出動を要請し、11時45分過ぎには機動隊によって総長室のバリケード解除がおこなわれ、5名が逮捕された。学生自治会中央委員会はこれらの事件に対し、機動隊導入をもたらした無意味な総長室占拠に対して抗議の意を表明すると同時に、学内自治団体に何の事前の連絡もなく機動隊導入を即決した大学に対しても抗議した⁵⁷⁾。

なお、五月祭の期間中に起きた事件ではあるが、大学としては五月祭とは直接関係しない事件と捉えており、学内広報紙上でこの年の五月祭の振り返りにおいては、この事件については一切触れられていない。全学闘争委員会は翌週の5月30日（木）にも、総長と学生自治会中央委員会との交渉の席に乱入して林健太郎総長に暴行を加える事件を起こしていた⁵⁸⁾。

4. 東大紛争後の五月祭の変化

A. 五月祭の再開と五原則の誕生

既に述べたとおり、1970年の五月祭再開にあたっては、学生委員会から参加企画が満たすべき条件として5つの原則（五原則）が提示され、五月祭常任委員会がこれに合意した⁵⁹⁾。この五原則の内容の基礎となったのは、1968年以前の五月祭にあたって大学が五月祭常任委員会に対して示していた「注意事項・特例事項」であった⁶⁰⁾。

注意事項・特例事項

五月祭は本学学生が平素の研究活動と文化活動の成果を学内外に公開し、それを通じて学生間の文化的交流を深め、本学と市民とが接触し交歓する全学的祭典である。従って、本学として五月祭の期間中は授業を休止し、一定期間中は学内諸規則についても特例を設け、できる限り協力援助をする。ただ大学の本質上、次の事項については特に注意しなければならない。

〔注意事項〕

大学は学問の自由を確保し政治的中立性を守ると共に、国の庁舎を管理する責任をも負っているから、学問的研究発表並びに日常の文化活動の成果の発表以外にわたる、政治的意図をおった宣伝的行為を行わないようにすること。特に特定政党の標語や標識、旗等を使用したり、大学の内外における当面の問題を政治的宣伝の手段として取扱わないようにすること。

五月祭の行事及び発表の主催団体は、各学部及び学内団体として届け出たものに限ること。その発表は学生及び学内者が行うものとし、学外者の協力は特に必要やむを得ないものに限ること。

五月祭常任委員会は、行事の細目について学生委員会と協議した事項以外のことが行われなように責任をもって統制すること。

〔特例事項〕

開催期間中、教室、研究室、会議室は所管部局長の了解を得て使用することができる。

掲示の受付事務は一部、五月祭常任委員会に委任する。

催物の案内、または宣伝用の掲示に限り、開催

日の前日から掲示場以外に掲示することを認める。
開催期間中、拡声器を使用することができる。

1970年の五月祭再開にあたって取り決められた五原則は、その後の五月祭においても前例・慣習として踏襲されたものの、その内容は年ごとに五月祭常任委員会と学生委員会が協議のうえ覚書を取り交わすことで決められた。そのため、初期の頃は文言に揺れがあったが、1972年に6月開催となるにあたって「開催時期が遅れたことを考慮し食品等の取扱いについて衛生上の注意を厳重に行なうこと」が追加された以外、内容が大きく変化することはなかった⁶¹⁾。

1977年に五原則の第5項目「特定の宗教・政党の宣伝活動の禁止」に「企業」が加えられ「特定の宗教・政党・企業の宣伝活動を行わないこと」となるが、翌1978年には元に戻り、代わって「(i)公序良俗に反しないこと、(ii)企業その他諸団体の宣伝につながる行為の禁止」とする「二附則」が追加された。興味深いのは、1979年には「数年前から […] いわゆる五原則および二附則が取り決められている」、1980年には「第43回五月祭〔1970年〕以降、[…] 学生の自主性を尊重するという趣旨に基づき、[…] 五月祭実施の基本原則として『五原則、二附則』がとりきめられている」と、あたかも5つの原則が最初に示された1970年の段階から二附則も存在したかのような書かれ方がされている点である⁶²⁾。「公序良俗に反しないこと」の項目は、違反しているかどうかの判断が恣意的になりがちであり、大学による企画内容に対する検閲につながりかねないとの批判を受けうるものだった⁶³⁾。大学としては、二附則も含めて長く慣習として尊重されてきた原則であることを示したい意図があったことが推察される。1980年以降、これら五原則・二附則の文言は変わることなく、同内容で毎年、大学と五月祭常任委員会との間で取り交わされることが慣習となっていった。

「五月祭の基本原則」としての「五原則および二附則」〔1980年以降〕⁶⁴⁾

- (1) 事故の危険性がないこと
- (2) 非営利であること
- (3) 本学学生が主体であること
- (4) 期間内に終了すること
- (5) 特定の宗教・政党の宣伝活動の禁止
 - (i) 公序良俗に反しないこと
 - (ii) 企業その他諸団体の宣伝につながる行為の禁止

B. 五月祭の「お祭り化」

1970年の再開に始まる1970年代の五月祭は、1960年代にも指摘されつつあった「お祭り化」の本格的な拡大をみた時代であった。企画の多様化によりいっそうの発展を見た五月祭であったが、同時に娯楽系の企画が拡大すると、研究成果の一般公開という本来の趣旨から外れるという批判（いわゆる「お祭り化」批判）を受けるようになっていた⁶⁵⁾。1970年以降、五月祭常任委員会が掲げたテーマを見る限りでは1960年代と同じ路線を踏襲しているものの、参加企画の内実は、従来の学部・学科の公開や自主的な研究成果発表などと比べて、模擬店や喫茶店などの飲食・物販や、ロックコンサートなどが数・規模ともに隆盛していった。学生委員会は1971年の段階で「五月祭は確かに「巨大化」し、巨大な祭りは、その末端で、新たな風俗、活発な商業的活動を出現させていた」と評している⁶⁶⁾。また、1973年には「紛争後の五月祭の一つの特徴とされている『お祭り』的な要素が、今年も引き続いて受け継がれており、こういう形態が固定化しつつあるような印象を受ける」と評している⁶⁷⁾。1976年には模擬店・喫茶店企画が減少して研究発表が盛り上がりを見せたものの⁶⁸⁾、テーマ「人間の新しいハーモニー」に見られるような政治的、社会的なメッセージ性を持つ企画は減少していった。五月祭常任委員会は「本部企画」としてこうしたテーマに沿った内容の講演会やシンポジウムなどを毎年企画したが、それらは来客が振るわず、1978年には「再び問われている大学の研究、教育のありかた、自治の問題への関心も、華やかな五月祭の雰囲気にかき消されてしま」うようになったと指摘された⁶⁹⁾。

5. おわりに

本稿では、1960年代から1970年代の五月祭における学生と大学との対立関係に着目し、五月祭の歴史を記述した。前半では、大学と五月祭常任委員会の対立をスローガン禁止問題、企画検閲問題、名簿提出問題、警官パトロール問題という4つの問題に着目して整理した。後半では、東大紛争期の五月祭を細かく追うことで、東大紛争による構内の混乱に起因するものとして捉えられがちであった1969年の五月祭不開催が、紛争による構内の混乱よりむしろストライキによる学年暦の乱れにより延期された結果として生じた事態であったことを明らかにした。このように五月祭の歴史を部分的ながら詳細に明らかにしたことは、本稿の成

果のひとつである。

しかし、本稿で対象としているのは、五月祭の歴史の中の一部でしかないほか、大学と学生との関係については、本稿での叙述に漏れた事実や、当時の学生教職員あるいは後世からの評価言説について、分析を補う余地は大きい。本稿の成果を踏まえ、引き続き調査と分析を重ねていきたい。

注・引用文献

- 窪田眞二「大学祭」『日本大百科全書：ニッポニカ』小学館，ジャパンナレッジ収録（最終閲覧日2023年9月29日）。
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000141371>
- 個々の学園祭に着目しても，名古屋大学「名大祭」についての研究（山口拓史「時代を映す大学祭：名古屋大学『名大祭』の変遷」『大学と学生』通巻493号，pp. 6-13，2005年9月。山口拓史，堀田慎一郎「名大祭：50年のあゆみ」〈名大史ブックレット14〉，名古屋大学大学文書資料室，2011年），京都大学の学園祭等の学生行事についての研究（松田陽一『京都大学における「学生の祭」の歴史に関する調査報告書：陸上運動大会・園遊会・文化祭・11月祭を中心にして』私家版，2012年）などいくつかの例が見られるものの，数は限られている。東京大学の五月祭については，その草創期について寺崎昌男『東京大学の歴史』〈講談社学術文庫〉講談社，2007年，において1章を割いて述べられているほか，東京大学の学内広報において五月祭の歴史を概説したもの（村上こずえ「蔵出し！文書館第12回」五月祭のはじまり」東京大学『学内広報』1507号，2018年2月）などがあるが，東京大学史についての基本文献である『東京大学百年史』においても，五月祭に関する記述はその創始について簡単に触れられているのみであり（東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』東京大学，1978年），五月祭の全体像を把握するには不十分と言わざるを得ない。
- 五月祭の誕生から戦後の再開までの詳細については，佐藤寛也「東京大学五月祭の歴史：東京帝国大学におけるその起源と変遷」（『東京大学大学院教育学研究科紀要』第59巻，2020年3月30日，pp. 241-251）を参照。
- 「平和の声一万余 五月祭に原爆禁止の署名」『東京大学学生新聞』46号，1950年5月25日，1面。
- 例えば「〈論説〉五月祭と平和」（同紙81・83合併号（五月祭記念特集号），1951年5月24日，1面）など。戦後期の五月祭の詳細については佐藤寛也「〈研究ノート〉戦後期における東京大学の学園祭」（『大学史研究』31号，東信堂，2022年12月30日，pp. 158-177）を参照。
- 「例年とちがって自由と平和のスローガンをかかっている」（「献立成った五月祭」同紙43号，1950年5月11日，1面）。
- 「五月祭最後の難関」同紙80号，1951年5月10日，1面。
- 「〈論説〉五月祭をむかえて」同紙121・122合併号（五月祭特集号），1952年5月22日，2面。
- 「銀杏の下，20万 平和の五月祭好評裡に」同紙123号，1952年5月29日，1面。
- 『第33回 五月祭』プログラム，1959年5月。ただし「読む五月祭へ」（『東京大学新聞』370号，復刊82号，1959年4月29日，8面）を見る限り，統一テーマの設定が新しい試みであるとは読み取れず，むしろ前年の基本テーマと同じ位置付けとみなされていたようである。
- 「統一テーマで一もめ 34回五月祭，21・22日に」同紙408号，復刊121号，1960年4月20日，3面。
- 「五月祭本部企画 大使講演に横やり」同紙452号，復刊165号，1961年5月3日，3面。
- 「大学はキューバが嫌い？」特集，同紙454号，復刊167号，1961年5月17日，5面。
- 「五月祭ニュース」については，一部が文書館に所蔵されているものの，現存するものが少なく全体像は不明瞭である。
- 「〈学内ニュース 学内一般〉五月祭をかえりみて」東京大学広報委員会『学内広報』166号，1972年7月21日。および以降毎年の同題記事。（同報205号，1973年7月6日。同報250号，1974年7月19日。同報290号，1975年6月23日。同報334号，1976年7月5日。）
- 同題記事，同報373号，1977年7月4日。
- 同じく，同報409号，1978年6月12日。同報450号，1979年6月25日。同報489号，1980年6月23日。
- 「五月祭警官パトロール 反対闘争の歴史と課題」『東京大学新聞』742号，1968年5月14日，6面。具体的にいつからおこなわれていたかは明らかではないが，この記事には「戦後」とある。
- 「『当日，警官は入れない』五月祭常任委で決定 大学側に申し入れ」同紙616号，1965年5月17日，7面。「五月祭 紛糾するパトロール問題」同紙655号，1966年5月9日，5面。「五月祭警官パトロール 反対闘争の歴史と課題」同紙742号，1968年5月14日，6面。
- 「さみだれの五月祭」同紙657号，1966年5月23日，7面。「五月祭警官パトロール 反対闘争の歴史と課題」同紙742号，1968年5月14日，6面。
- 「総長の談話を配布 五月祭警官パトロールで」同紙658号，1966年5月30日，1面。
- 「五月祭常任委 警官パトロールには反対 自主的警備団を計画」同紙697号，1967年4月24日，7面。「五月祭 警官立入り実施さる！」同紙701号，1967年5月22日，1面。「学生委 反対の声を押切る 大衆団交認めず」同9面。
- 「五月祭 緊迫する“警官導入”問題」同紙743号，1968年5月20日，15面。
- 「解説」同紙744号，1968年5月27日，1面。
- 前掲記事「五月祭 緊迫する“警官導入”問題」。
- 同記事及び1968年5月20日，15面。「五月祭 警官立入り実施さる！」同紙701号，1967年5月22日，1面。当初五月祭常任委員会は実力阻止はおこなわない方針であったはずなので，この一団の本富士警察署へのデモが五月祭常任委員会が主導したものであったのか，集会に集まった学生が独自に動いた結果なのかは不明瞭。
- 「学生2名を不当逮捕」同紙744号，1968年5月27日，9面。
- 東京大学「告示」同紙744号，1968年5月27日，1面。
- 「警官導入 廃止の方向を確認 23日 育，教授含め討論集会」同紙744号，1968年5月27日，9面。
- 「〈ブレイバック『東大紛争』1〉 紛争の経過 その1」同紙1583

- 号, 1988年5月10日, 4面。
- 31) この確認書は「従来の『大学の自治=教授会の自治』という立場を否定し, 学生や職員を含めた『全構成員自治』を定めたもの」とされるが, その解釈については学生(各学部学生自治会等)と大学の間に認識の相違があり, 一定しない。〔「東大確認書について」東京大学教養学部学生自治会ウェブサイト, 最終閲覧日2023年9月29日(URL下掲)。加藤一郎『「7学部代表団との確認書」の解説」東京大学出版会, 1969年3月。〕
<http://todaijichikai.org/kakunin>
- 32) 1967年度は1967年1月, 1968年度は1967年12月に発足していた。
- 33) 図を参照。1969年度に本郷キャンパスに在籍したのは4年生以上の学年のみであった。
- 34) 「五月祭は延期」『東京大学新聞』784号, 1969年4月21日, 9面。
- 35) 「2985人が本郷へ進学」同紙811号, 1969年12月8日, 1面。
- 36) 学部ごとに卒業時期のずれ方には差異があった。図は主要な学生動態を模式的に表したものであり, すべての学生の進級・卒業過程を反映しているものではない。特に, 駒場で留年した場合, 本郷で2学年以上留年した場合, 6年生課程の場合は省略されている点に留意されたい。1968年度の年の4年生の卒業は1969の6月であった。1969年度には遅れを取り戻し, 1970年3月に多くの学生が卒業した(文学部・経済学部のみ4月の卒業)が, 本郷への進学が遅れた1967年度入学者の卒業は, 再び3ヶ月遅れの1970年6月末となった。また, 1968年入学者も半年遅れて10月の進学となったが, この学年は1972年3~4月には卒業している。ただし, この頃は東大紛争の影響もあり多くの学生が留年していたため, 実際の学年進行は図(本郷における1学年の留年まで図示している)よりも一層複雑であったことには留意が必要である。
- 37) 第42期五月祭常任委員会「70年度の五月祭にむけて: 進学生によびかける」『東京大学新聞』811号, 1969年12月8日, 6面。
- 38) 「43期常任委発足 五月祭」『東京大学新聞』816号, 1970年1月19日, 1面。
- 39) 五月祭常任委員会はこれを「企画検閲」と呼んでいた。
- 40) 「大学当局に要求 五月祭常任委が方針」『東京大学新聞』821号, 1970年2月23日, 1面。
- 41) 「取り組み進む五月祭」同紙825号, 1970年4月13日, 1面。
- 42) 「〈学内ニュース 学内一般〉五月祭をかえりみて」東京大学広報委員会『学内広報』166号, 1972年7月21日。この記事は1972年のものだが, 「本年も一昨年・昨年と同じく」とある。
- 43) 柴田章(五月祭常任委員長)「青春の五月祭を」特集 第43期五月祭のめざすもの, 『東京大学新聞』826号, 1970年4月20日, 5面。「五月祭おわる」同紙832号, 1970年6月1日, 1面。
- 44) 「『粉砕』叫び襲撃『全共闘』」同紙832号, 1970年6月1日, 4面。
- 45) 「〈学内ニュース 学内一般〉五月祭開催中の事件」東京大学広報委員会『学内広報』76号, 1970年6月5日。
- 46) 「44期五月祭常任委員会が発足」『東京大学新聞』860号, 1971年1月18日, 1面。
- 47) 「五月祭幕閉じる」同紙876号, 1971年5月24日, 1面。
- 48) 「〈学内ニュース 学内一般〉五月祭あれこれ」東京大学広報委員会『学内広報』118号, 1971年6月4日。
- 49) 本稿「3. B. 1969年五月祭開催されず」参照。
- 50) 「五月祭の実施を再確認」『東京大学新聞』907号, 1972年2月14日, 3面。
- 51) 結果的に新3年生の本郷への進学は6月1日となった(「45生本郷進学は6月1日」同紙918号, 1972年5月22日, 1面)。
- 52) 「五月祭の日程決まる 6・23~6・25に開催」同紙914号, 1972年4月24日, 1面。
- 53) 「五月祭ひらかる」同紙923号, 1972年6月26日, 1面。
- 54) 「〈学内ニュース 学内一般〉五月祭をかえりみて」東京大学広報委員会『学内広報』166号, 1972年7月21日。
- 55) 同上。
- 56) 「史上最大の五月祭」『東京大学新聞』955号, 1973年4月16日, 1面。「各学部の活動活発に 五月祭 基礎科が初参加」同3面。
- 57) 「本郷に機動隊導入 五月祭初日 全闘委の総長室占拠で」同紙1003号, 1974年5月27日, 1面。
- 58) 「〈一般ニュース〉総長に対する『全闘委』集団の暴行」東京大学広報委員会『学内広報』243号, 1974年5月31日。
- 59) 本稿「3. C. 1970年五月祭の再開」参照。
- 60) 「五月祭実施の原則について」東京大学ウェブサイト(最終閲覧日2023年9月29日, URL下掲)。実際には「昭和[...]年度 五月祭開催について」という文書名で年毎に発行されていた(文書館所蔵資料「昔の五月祭1」S0359/SS03/0002, 1952-1970年)。
https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/events/h10_03.html
- 61) 「〈学内ニュース 学内一般〉五月祭をかえりみて」東京大学広報委員会『学内広報』166号, 1972年7月21日。および以降毎年同題記事。(同報205号, 1973年7月6日。同報250号, 1974年7月19日。同報290号, 1975年6月23日。同報334号, 1976年7月5日。同報373号, 1977年7月4日。同報409号, 1978年6月12日。)
- 62) 同題記事, 同報450号, 1979年6月25日。及び同題記事, 同報489号, 1980年6月23日。
- 63) 「五原則二附則を考える」『東京大学新聞』1499号(五月祭特集号), 1986年5月13日, 4面。
- 64) 「〈学内ニュース 学内一般〉五月祭をかえりみて」東京大学広報委員会『学内広報』489号, 1980年6月23日。
- 65) 「アンバランスの五月祭 各企画に話題を拾う」特集, 『東京大学新聞』537号, 復刊250号, 1963年5月22日, 4面。「転機にきた五月祭 マンネリ化とマスコミ化」同紙578号, 復刊291号, 1964年5月27日, 5面。
- 66) 「〈学内ニュース 学内一般〉五月祭あれこれ」東京大学広報委員会『学内広報』118号, 1971年6月4日。
- 67) 「〈学内ニュース 学内一般〉五月祭をかえりみて」同報205号, 1973年7月6日。
- 68) 「カラフル 五月祭 喫茶店減少の傾向」『東京大学新聞』1085号, 1976年5月24日, 1面。
- 69) 「メロウな五月祭 華やかに幕 史上空前の12万人」同紙1167号, 1978年5月29日, 1面。

付記

本稿は, 筆者の修士学位論文の一部分を元に, 加筆修正したものである。

本稿の執筆にあたっては, 五月祭常任委員会及び

(公財) 東京大学新聞社から所蔵する資史料を閲覧、借用させていただいた。また、東京大学文書館の教職員の皆様には、資史料の利用に加え、関連するリファレンス調査にもご協力いただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。

(指導教員 福留東土教授)